

(10) 余市高等学校の運営計画

校長 平野 純生

2020年度 年間聖句

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」

ガラテヤの信徒への手紙 5章13節

はじめに

2020年度入試に向けての生徒募集状況は、私たちの予想を超えて順調でした。この数年の中でも早い段階から多くの受験の申し込みが入る状況で、受け入れ可能生徒数との関係で申し込みが70名に到達した段階で受付を一時停止しなければならないほどでした。こうした状況になった理由についての詳しいことは入学者アンケートなどの分析をしなければわかりませんが、この10年間ほどの地道な入試・広報活動の成果としてとらえることもできるように思います。

今年度は、先に決定した北星余市高校将来計画の実現を目指し、余市高の教育力をさらに充実させ学校としての魅力を高める中で、余市高が全国の多くの方々からも、また地元の方々からも選ばれる学校になっていくための第1歩を踏み出していく大切な1年になります。

1. 「建学の精神」に基づくキリスト教教育について

余市高が、日本の高校の中で評価される教育を行ってきたことの根本には、キリスト教学校であることを意識して日々教育実践をし、どんな生徒にも教育の可能性があることをあきらめなかったという基本姿勢があります。キリスト教学校にとって最も大事な礼拝である毎週月曜日の全校礼拝、火曜日から金曜日までの教室での放送礼拝をしっかりと守ることは、生徒が日々の生活の中で「イエスの福音」を感じて、キリスト教学校において生活し成長していく土台となるものです。またその実現のためには教職員がそのことを常に意識することも必要です。ですから今年度は、教職員一人一人が、いつもキリスト教教育の意味について学ぶことができる機会を大事にしていきます。そうすることで教職員自身がキリスト教について主体的に考えていけるようにしていきたいと思います。

また、日本キリスト教団余市教会は、年間に2回の北星デーを実施し余市高を支えてくださっています。昨年度も数名の生徒が余市教会の日曜礼拝に参加しており、洗礼を受けた生徒もおります。また教会関係の取組みにも積極的に参加している生徒の数は年々多くなっています。今年度も、余市高と余市教会の関係をより深めていき、より多くの教職員や生徒が教会を身近に感じられるようにしていきたいと思います。そのことが学校での礼拝などにも良い影響を与えることとなります。

2. 教科指導及び生活指導等について

1) 教科指導

余市高では、50年以上に及ぶ歴史の中で教科指導を教育活動の根幹をなすものとしてとらえてきましたが、特にこの数年、「余市高の授業をより良いものにしたい」という教員の問題意識が高まってきており、教科指導の充実のために教科方針や教師研修会で議論を行ってきています。教員個人でも「生徒たちが満足できる授業」、「生徒たちが考える授業」をどうすれば作ることができるかを考え実践しようという動きが始まっています。今年度は特に、北星余市高校将来計画で示したように、すべての生徒に必要な基礎的な学力を身につけてもらうことや探求的な学びを作っていくことを目指し、各教科や総合的な探求の時間における

具体的な授業方法や内容、教科横断的な取組み、またはそうした授業の評価方法などを検討し、できることから実践していきます。そうして生徒たちが社会の中でしっかりと生きていけるために必要な学力を身につけ、日々の授業に魅力を感じることができる学校になるという目標に近づいていきたいと思えます。

2) 生活指導

生活指導は、生徒たちが民主的な集団作りに参加し、自立した民主的な人格として成長するために必要不可欠な指導です。クラス担任を中心にクラスを基礎とし生徒たちに自分たちの集団の在り方を考えさせる HR 指導を行い、さらに生活指導部をはじめとするすべての教員が関わることで、その実現を目指していきます。昨年度は、1学期から盗難事件が多発しましたが、教師集団としての対応が後手に回ってしまい、生徒や保護者が学校に対する不信感を持つ状況もありました。また、生徒間のいじめと判断できるような事件も起こっており、生活指導における課題を自覚しなければなりません。今年度は、そうした生活指導におけるいくつかの課題と向き合っ、起こってくる事態に機敏に対応できる教師集団を作ることが求められます。特に教員は、いじめにつながるような生徒たちの行動を敏感に感じ取れるように、生徒たちから話をよく聞くことや保護者や下宿管理人との連携を大切にしていきます。

3) クラブ指導

余市高のクラブ指導においては大会で良い成績を残すことよりも、クラブがどんな生徒にとっても居心地の良い場所となり、健全な活動ができるように指導することを大切にします。昨年度は、新しい愛好会や同好会も作られ生徒たちが自主的にやりたいことを実現しようという動きがありました。今年度も生徒たちにとって満足度の高いクラブ活動が実現できるように努力します。

4) 進路指導

進路指導についてはこれまで、進路指導部や担任が生徒たちと個人的に面談するなどの方法で行ってきました。特に担任の個人的努力に期待して行われてきた現実もあります。しかしそうした進路指導から発展したやり方として「進路カフェ」を始めました。昨年度も外部の若者を支援する団体や企業の担当者の方に来ていただき、生徒が自由に相談できる取組みとして開催しています。生徒たちは「進路カフェ」があることで、学年に関係なく相談でき、相談したい内容を自分で決めることができるようになってきているようです。今年度も、「進路カフェ」をより充実した内容にし、生徒たちが生き方を考えることと合わせてより良い進路選択ができるようにしていきたいと思えます。進路を決めることは、単に進路先を決めることでなくこれからの生き方を考えることであるという余市高が大切にしている考えに基づいて進路指導を行っていきます。

また、大学への進学を希望している生徒に対して、北星学園大学や北星学園大学短期大学の情報をこれまで以上にしっかり知らせ、実際にキャンパス見学なども行うことを検討します。そうすることで、学園内進学者を増やすことにつなげたいと思えます。具体的には、5年～10年後を目途に卒業生の1割程度の学園内進学者数となるように努力します。

3. 教職員の資質向上について

教員の資質向上のための取組みとして、年に2回の教師研修会が重要な機会となっています。この教師研修会での議論は教員間の指導における共通理解を図るために大いに役立っています。今年度も教科指導や生活指導などの時々の課題をテーマとした研修を行っていきます。

また、2016年度から続けている北海道教育大学札幌校の臨床心理士との事例検討会議を昨年度も行いました。この会議は教員の生徒理解を深めるための最良の機会です。臨床心理士から定期的に事例を踏まえた助言を受けることで、経験則だけでなく理論的背景に基づいた専門スキルを学び、生徒理解が深まり教育実践に援用できました。今年度も、多くのことを学んで、教員と生徒たちとの関りを豊かなものにしていきたいと思えます。また、事例検討の質をさら

に充実させるために生徒の発達に関わる事柄を深めるための学習を取り入れることも考えています。

4. 生徒募集について

この数年の生徒募集活動が成功した最も大きな理由は、広報活動を充実させてきたことです。特に、インターネットを使った広報活動が重要でした。学校の様子をブログで発信する、生徒や保護者の動画で余市高の教育を伝えるなど、学校のホームページをより魅力的なものにしました。また、SNS の活用を重視し、学校に関する情報を発信してきました。ここ数年の傾向は、子育ての悩みを抱えて自分の子どもにあった学校を探す保護者が多く、そうした保護者がインターネットで検索して余市高を探し出し、教育相談会や学校見学につながっていることです。また SNS での発信で余市高とつながってくれた保護者も多くなっています。今年度も、このインターネットでの入試・広報に力を入れて、これからの生徒募集の方向性の見通しを明確にしたいと思います。

もちろんこれまで通り、余市高の教育を支援してくれている PTA 関係の方々、不登校生支援をしている個人や団体の方々などとのつながりを大切にしていきたいことは当然です。

また、地元である余市町や後志圏、札幌圏からの入学者を増やすことも、地元を支えられる学校となるためにはどうしても必要です。今年度は、余市町から数名の生徒が入学してくれる見通しです。このことは小さな変化ではありますが、入学してくれた生徒を大切に育てて地元からの入学者の増加につなげていきたいと思います。具体的には後志圏からの入学者数を、3年後には5名、5年後には7名、10年後には10名にするという目標の達成を目指します。

5. 教育環境及び施設整備、財政について

1) 施設・設備

今年度は、旧校舎、旧体育館、合宿所の3つの老朽化した建物の解体と、それに伴う機能移転の工事を行います。特に機能移転工事を効率的で無駄のないものにすることを意識します。また、現在の教室棟校舎の機能的な使用を検討します。とりあえず全学年の教室を2階に集約して効率的な配置とします。

今年度は盗難事件を教訓とし、今後被害を出さないよう学校の責任を自覚し、全校生分の個人ロッカーを設置し、生徒が盗難被害にあわないように配慮をしていきます。

2) ICT 環境

現在、小学校や中学校では ICT 教材を使った授業展開が当たり前の状況になってきました。高校で ICT 環境がないという事態は、生徒が学校を選ぶにあたってのマイナス要因にもなります。今年度は、各教科の活用の見通しと合わせて具体的な整備計画を立てて生徒が ICT 教材を活用できるように準備を進めていきます。

3) 財政目標、財政改善の取組み

余市高が財政的な見通しを持つことは、今後とも余市高の教育を続けていくためにどうしても必要です。今年度は将来計画に基づき、財政計画を明確にします。具体的には、基本金組入前当年度収支差額の支出超過額を、2022年度までは4,000万円、2023年度以降は法人費繰出金の免除を止めた上で4,000万円以下、2026年度からは段階的な改善を図り、2030年度からは2,000万円以下であることを目指します。そのための具体的な取組みとして、2021年度から校納金の値上げを行うことや企業寄付を増やしていくことを追求します。

6. 地域連携、高大連携

余市高は、地域の役に立ち、地域に信頼されて、地域に支えられる学校になるとともに、地域の中学生から進学先として選ばれる学校になる必要があります。昨年度もそのために地域開放事業や地域と連携した様々な形での取組みを行ってきました。学校開放事業としての「あおぞら教室」は、多くの余市町民の参加を得て余市高への理解を深めることに貢献しました。ま

た、総合講座「ぶどうのおしごと」で栽培したぶどうから作ったワインを世に出すことができるようになりました。まだワインの量は多くありませんが、今後の地域とのワインづくりを通じた連携への期待が持てます。また、農業と福祉の連携を行う NPO 法人ドリームワークスとの協力した取組みも行いました。今年度も、それらの取組みを継続し、より多くの生徒たちが積極的に関わっていけるような地域連携の仕組みを作っていくことを目指します。

北星学園大学との連携の観点で言えば、余市高と地域の方々との連携の取組みに北星学園大学の学生が参加し、アクティブラーニングの場として学んでいくことができると思います。将来にわたって様々な可能性を持った余市という地域で、北星学園大学の学生と余市高の生徒がともに学び、体験する実践を作り上げていきたいと思っています。

7. 寮・下宿について

余市高の寮・下宿は、余市高の教育を行っていく上で大変重要な存在です。安定的に寮・下宿が存在していなければ、余市高の教育を行っていくことは難しくなります。管理人の高齢化は深刻な状況です。あと数年で継続できなくなる下宿が出るのが予想されます。

今後も安定して寮・下宿が存在していくために、新しい寮・下宿を作るための準備をする必要があります。余市町内で寮・下宿の魅力をしっかりアピールして、町民に興味を持ってもらうようにします。寮・下宿を作るための財政的な支援として、ふるさと納税や様々な補助金を活用した余市町からの財政的な支援を求めています。また、企業寄付などを活用した寮・下宿を支援する仕組みを作ることも検討していきます。

以 上